



Title	現代社会における「参加」の可能性：ボランティアと公共性
Author(s)	関， 嘉寛
Citation	大阪大学， 2002， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44170
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	関 嘉 寛
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 1 7 2 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 14 年 7 月 16 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学 位 論 文 名	現代社会における「参加」の可能性——ボランティアと公共性——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 木 前 利 秋 (副査) 教 授 山 口 節 郎 助教授 渥 美 公 秀

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、社会および個人が均質化し断片化していったために「生」に関わる決定から個人が疎外されている現代において、新しいかたちでの政治参加の形態、いにかえるならば新しい公共性を形成する上でのボランティアの可能性を探る。

まず、第1章では、本研究の社会的背景と諸概念について述べる。

現代において、別様の社会のあり方が成立している。その特徴を、情報社会、グローバル化、そして新保守主義の台頭によって表すことができる。情報社会は経済的合理性にもとづき、均質的な空間を成立させつつある。その技術的恩恵を被りながら、グローバル化は進んでいる。グローバル化のもとでの均質化の作用は、社会の断片化としてとらえられる。たとえば、グローバル化のもとでは、ローカルな価値の多元性を解体し、グローバルスタンダード＝世界標準という単一の価値が優先される。このような価値基準の単一化は、その事象が持っていた意味連関を分断することになる。

均質化と断片化が進む中で、国家や政治のあり方も変容した。情報社会とグローバル化に対応した国家形態と政治システムが求められるようになった。その中で、市場における自由競争の維持が個人の自由と平等を保障すると主張する新保守主義が、力を持ってきた。

しかし、この新自由主義的システムは、個人の差異を経済的合理性に回収するという点で、新しい不平等をもたらす。それは、私たちにとって、自分の「生（生命・生活の質・生き方）」に関わる決定からの疎外として現れている。新自由主義のシステムは効率性を向上させるために専門分化を進める。この過程の中で、私たちは、ごく限られた領域の専門家にすぎなくなる。結果、他の領域では「素人」として決定からは排除されるようになるのである。

しかし、私たちは自らの「生」に関わるさまざまな決定に何らか形で参加が保障されなければならないだろう。なぜならば、現代におけるこの専門分化は、いたる所で弊害をもたらしているからである。このような機能分化は、社会全体の複雑性を縮減するために行われるが、個々の領域にとっては逆に複雑性が増大するという現象を引き起こしている。それが結果として社会全体に影響をおよぼしている。

このような前提のもとで、本研究ではボランティアに注目した。なぜならば、それが新しい決定への「参加」を保障する可能性を持っているからだ。そして、この参加は、広い意味での「政治参加」ということができるのである。

この政治参加が含意することは何か。本研究では、いわゆる政治的活動に対して、広義の政治を提案する。ギデン

ズ (Giddens, A.) がいうように、現代社会において政治は「ライフ・ポリティクス」を基盤とした広い意味でとらえる必要がある。

ライフ・ポリティクスとは、みずからのアイデンティティに関わる政治を意味する。したがって、このように政治概念を転換させるならば、私たちはそれに関わっていく必要がある。

広い意味での政治参加とは、制度的な参加だけを意味しない。たとえば、投票行動をしたり、場合によっては住民運動に参加したりする、このような参加だけを念頭におく必要はない。むしろ、このような参加から距離を取り、みずからのアイデンティティの意味を問い、間接的に社会的諸関係に影響を与えるような行動が重要となってくる。たとえば、環境問題はデモをしたり、研究者が取り上げるだけでは社会的変容はもたらすことはできない。一人ひとりのライフスタイル——それはセルフ・アイデンティティに大きな影響を与える——において、トピックとして取り上げることによって、間接的に、社会的な話題として浮上してくる。このような、政治参加のあり方が現代において求められてくるのである。

第2章においては、前章で提起されたボランティアの社会的意義を受け、ボランティアの分類をおこなっている。

日本では、行政的要請によってボランティア活動が振興されたことにより、ボランティアに対して否定的な診断を下す場合がある。「ボランティアは行政の責任転嫁である」という制度的な視点からの批判や、自発性の称揚が自発的従属のメカニズムとして働くという概念的な批判など数々ある。たしかに、ボランティアには体制への動員という側面がある。だが、それだけには回収されないようなポテンシャルを持っていると本研究では考える。

本研究では、ボランティアを制度との関係性から分類をおこなった。それは、ボランティアが政治と関連しているからである。制度および伝統と何らかのつながりを持つボランティアを「制度化されたボランティア」として、制度にも伝統にもつながりを持たないボランティアを「新しい参加としてのボランティア」としてまとめることができる。そして、本研究が対象とするボランティアはこの後者のボランティアである。

この新しい参加としてのボランティアは、既存の経済的・政治的権益に関わる活動とは一線を画すオルタナティブな活動として特徴づけられる。このようなボランティアがもつ社会的意義を考える場合、社会運動論を参考にすることができるだろう。というのも、社会運動は、制度化されない政治参加の形態であり、研究の対象として長い歴史を有しているからだ。

そこで、第3章では、社会運動論を概括し、新しい参加としてのボランティアが持つポテンシャルについて考えている。

社会運動論から、導き出される新しい参加としてのボランティアの特徴および課題は、新しい政治パラダイムとアイデンティティである。新しい政治形態は、既存の政治形態である利権政治とは一線を画している。その中でも、特に市場の抑制と平等の実現をかかげるオルタナティブな政治は新しい参加としてのボランティアと関わっている。また、新しい参加としてのボランティアによって形成されるアイデンティティは現代におけるアイデンティティのあり方に対応している。それは、両者とも状況依存的であり、多面的な性格を持っている。

そして、このライフ・ポリティクスは公的なものと私的なものとの関係性を問題としている。なぜならば、ライフ・ポリティクスは今まで私的なものと考えられていたものを公的なものとして取り上げる作業でもあるからだ。

第4章では公共性の問題をボランティアとの関係で考えていく。

まずはじめに、公共性概念について整理することからはじめる。公共性概念には **official**、**common**、**open** の三つの位相があると考えられる。

今日の公共性は主に **official** と **common** にもとづき、形成されている。結果として、公私の関係が上下関係 **official** と包摂関係 **common** によって重層化している。そのため、公が私に対して超越するものとして形づくられている。

しかし、このような公共性のもとで新しい不平等が生じていることから、新たな公共性が求められる。それは、公と私の明確な区別に基づかない、水平的、かつ循環的な関係である。どちらが上に立つのではなく、公は私を基礎に持ち、公が私に影響をおよぼしていくという公共性があらわれつつある。そのような公共性の成立は、従来の国家や共同体だけでは困難である。それらは垂直的であり、一方的な関係性から成り立っているから。新しい参加としてのボランティアは水平的で脱構造的な性格を持っているので、**open** な公共性を提示することができる。そして、この三つの公共性が融合したところにこの新しい公共性の創出が見えてくる。

結論において、このような公共性がいかに構想されうるかについて考えてみる。そのために、空間論的分析を用いた。公共性は、実のところ境界概念を中心とした空間性を持っている。つまり、公的な領域と私的な領域の境界性が公共性の性質を決定する。新しい参加としてのボランティアによって形づくられる空間編成は、明確な境界と曖昧な境界とを同時にむくみ込むような境界によって特徴づけられる。この境界は、建築物でいう屋根の作用と類似しているという意味で「ルーフ」と呼ぶことができる。ルーフはある価値や意味によって支えられる。新しい参加としてのボランティアは、ライフ・ポリティクスの中で、新しい自由と平等の意味を提示するということによってルーフを形づくることができる。つまり、現代における参加とは、このようなボランティアによる新しい公共性を形づくることによって、可能となりうるのである。

論文審査の結果の要旨

ボランティア論としては、これまで多数のフィールド調査か、でなければボランティア実践のための実用書の類が多くを占め、本論文のようにボランティア活動を理論的に考察したものはまだ少ない。ボランティア活動の社会的・政治的意義を考察した本論文はその欠を補う上で注目される。また本論文は、ボランティア活動というテーマの視角から、政治学・政治社会学で近年、話題となっている新しい政治、公共性の概念について、著者独自の見解を提起した点でも興味深く、博士号授与に値すると評価しうる。